

二〇二四年度

群馬県立女子大学 文学部 美学美術史学科

後期入試問題

小論文

試験時間は十一時～十二時までの六十分です。中途退室は認めません。

途中で気分の悪くなった場合は、黙って手を挙げて下さい。

問題用紙はこの表紙を含めて五枚、解答用紙は一枚です。それぞれが配られたら、指示に従って、解答用紙の所定の欄に受験番号と氏名を記入して下さい。試験開始の合図があるまで問題用紙の表紙をめくって問題を見てはいけません。

受験番号と氏名を記入し終えたら、静かに試験の開始を待って下さい。

問題

次の文を読み、問いに答えなさい。

「自ら創造する以上に素晴らしいことはない。ただ音の世界でのみ呼吸している忘我の時、たったそれだけのことなのに何と素敵すてきなのだろう。」

一八五三年、クララ・シューマンは、創作の最後の火が一瞬燃え上がった時、日記にこう記した。彼女は現代日本でおそらくもつとも知名度の高い女性作曲家だろう。しかしセル・シヤミナードやエセル・スマイス等といった、次世代の女性の同僚たちのように、「作曲家」として認められることを求めていたかは疑わしい。

クララ・シューマン（一八一九～九六年）は、父フリードリヒ・ヴィークの英才教育を受け、九歳で公開演奏会デビュー、十代半ばにしてピアノistとしての名声を築いた。ローベルト・シューマンとの結婚後も公開の舞台に立ち続けた。これは当時としては異例である。夫の死後は、旺盛な演奏活動とともに、教育や『シューマン全集』の編纂へんさんにも従事し、七六年の生涯を音楽家としてまっとうした。

クララはピアノistデビューとほぼ同時期より作曲も手がけた。中心ジャンルはピアノ曲と歌曲。室内楽作品の《三つのロマンス》は、今日ヴァイオリニストのレパートリーとなりつつある。オーケストラ作品は、ピアノ協奏曲以外は失われている。

彼女は決して多作ではなかったが、結婚後もコンスタントに作曲し、出版を続けた。しかし一八四六年にピアノ三重奏曲を完成させると、筆が止まる。再び創作意欲が溢あふれ出るのは一八五三年初夏で、立て続けに三曲書いた。その後また筆は滞り、夫の死から半年後に書いたピアノ曲が、事実上の白鳥の歌（注）となった。以後、彼女は演奏活動に専念する。

なぜ、クララは作曲を断念したのだろう。複合的な要因が考えられるが、ここでは音楽文化全体の地殻変動に注目したい。

クララのデビュー当初、標準的なプログラムは自作と同業者の作品から構成されていた。音楽家は自らの力量を示すために、技巧を凝らした華麗な作品を自作するのが当然であった。だが、受け狙いの派手なパフォーマンスを批判する音楽家たちもいた。彼らが標榜ひょうぼうするのは、精神を高めるような美的体験を与えうる音楽芸術の創造と実践である。その代表格はロ

ーベルト・シューマンやフェリックス・メンデルスゾーンらで、彼らは創作活動において理想を求めたのみならず、それまで顧みられなかった過去の作品にも目を向けた。

フリードリヒ・ヴィークも若者たちの試みに共感していた。彼は娘の有能なマネージャーとして、プログラミングに際しては、聴衆の好みを考慮して時流に沿った曲を中心としながらも、早い時期からバッハやベートーヴェンの作品を少しずつ取り入れた。当時としては大胆な試みである。

ローベルトとの結婚後、このバランスは急速に一方に傾いていく。すなわち、過去の作品が増加するとともに、技巧的で華麗なタイプの同時代人の作品は激減する。夫の死後、クララの主要レパートリーを構成するのは、バッハ、ベートーヴェン、モーツァルト、シヨパン、メンデルスゾーン、そして夫ローベルト・シューマンとブラームス。ブラームス以外はすでに没した過去の「偉大な男性作曲家」たちである。今日の私たちが「王道」とみなすレパートリーの確立にあたって、クララはキーパーソンの役割を果たした。

ところで、過去の作品をレパートリーの中心に据えることは、必ずしも自作を披露する必要がなくなることの意味する。演奏家にとって作曲の能力はもはや必須ではない。この演奏家と作曲家の分離に、ジェンダー問題が絡んでくる。というのも、音楽が「芸術」とみなされるようになっていく過程で、「独創性」こそが「芸術作品」の核心とされたのだが、性別役割分担に特徴づけられた時代のジェンダーイメージは、独創性は男性のみが有する能力で、女性は創造性に欠ける性とみなしたのである。この価値観をクララが内面化していった節がある。ピアノ三重奏曲を試演した後、彼女は日記にこう記した。「自ら何かを創造し、それを聴く以上の喜びはない。もちろん、力強さと、そここで創造性に欠けた、女性の手によるものには違いないが。」

クララ・シューマンは、夫の死後、創作を断念する一方、「ローベルト・シューマンの妻」として彼の作品を積極的に紹介していくことを選んだ。彼女も時代の求める女性像から決して自由ではなかったのだ。それでも、女性が職業を持つことが困難な時代に、彼女のやり方でプロの音楽家としての生涯を貫き、ピアニストという職業を女性たちに切り拓いたパイオニアであったことは間違いない。

(玉川裕子「女性作曲家から見る音楽史(2)」、日本経済新聞、二〇二三年五月十八日、夕刊)

※出題に際して、一部表記を改めたところがある。

(注) 白鳥の歌…死ぬ間際に白鳥が歌うという歌。その時の声が最も美しいという言い伝えから、ある人が最後に作った詩歌や曲などのこと。

問い

本文を要約した上で、それをふまえ芸術や文化に関するあなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。